

ブライアン・ウィルソン博士 の逝去を悼んで

中野 毅

NAKANO Tsuyoshi

イギリスのオックスフォード大学オール・ソウルズ・カレッジ名誉教授のブライアン・ウィルソン博士が、去る10月9日(土)に心臓発作で急逝された。享年78歳であった。永らくパーキンソン病を患い、近年は一人で外出するのにも不自由であったが、親しい友人とレストランで夕食中に倒れられたとのことである。葬儀は、10月21日(木)の午前11時30分から同大学オール・ソウルズ・カレッジ(All Souls College)の礼拝堂(Chapel)で行われた。

ウィルソン博士は20世紀後半を代表する宗教社会学者の一人である。1962年にオックスフォード大学の社会学教授(Senior Reader)ならびに由緒あるオール・ソウルズ・カレッジのフェローとなり、イギリスにおける社会学、特に宗教社会学の深化発展に寄与されたばかりでなく、国際宗教社会学会(The International Society for the Sociology of Religion)の会長(1971-1975)として、また終身名誉会長(1991-2004)として、日本を含む世界の主要国に会員をひろげ、様々な国を自ら訪問して、宗教社会学をまさに国際的に普及させる第一線に立って活躍された。こうした量的な面のみでなく、同会の質的な発展にも彼は大きく貢献した。同会の母体はフランスにおけるカトリック系の社会学者の集合体であり、戦後の都市化における教会の衰退を挽回する方途を探る応用学的な宗教社会学(Religious Sociology)が主たる研究であった。ウィルソン博士は、そうした規範的研究をデュルケームやウェーバーを基盤とする経験科学としての宗教社会学(the Sociology of Religion)へと脱皮させ、発展させたのである。

宗教社会学者としてのウィルソン博士の学問的業績は、なによりも「世俗化論」の提唱、および「セクト」「新宗教運動」の研究であることは言うまでもない。1960年代の主要な著作(Sects and Society, 1961; Religion in Secular

Society, 1966) などを通して、彼は世俗化論 (Secularization theory) の提唱者として有名になったが、その主張は、合理的に編成され運用される現代社会はますます世俗化し、宗教の社会的意義は失われるというものであった。こうした初期の論調は宗教の衰退論 (decline of religion) として受けとめられ、伝統的な宗教界に強い衝撃を与えた。筆者がオール・ソウルズ・カレッジで客員研究員として滞在していた時 (1988-89) でさえ、イギリス国教会の神学者から、ウィルソンの研究は「きわめて危険な学問だ」と評されて驚いた経験がある。

しかし彼の世俗化論は、他方のセクト諸派の研究に見られるように、宗教自身の変化を視野に入れたものであり、それは単純な宗教衰退論ではない。確かに、社会の近代化・合理化によって、社会全体の基本秩序や制度、特に国家制度は非宗教化され、宗教は社会全体のシステムにおいては周辺的な領域で、または社会の公的領域と分離された私的な領域において、多様なセクトまたは新宗教運動として変容しつつ展開すると捉えた。従って国教制や制度化された伝統教団は衰退し、総体として宗教は周辺化するという主張となった。特に、初期の諸論考においては、宗教の重要性の減少という消極的な論調が表立っていたことは事実である。

しかし、アフリカやアジア、特に日本に何度も訪れて、それらの地域における新宗教運動に親しく接するにつれ、これらの運動が、人々のエネルギーや情熱を効果的に動員するのみでなく、他者や環境への深い関心と愛情、善意や献身意欲を引き出していることを評価するようになり、過度に合理化され、「鉄の檻」となりつつある現代社会では、それらの人間的な資質や情熱を薫発する数少ない源泉として、むしろ評価する論調が 80 年代以降は前面に出てきた。特に日本の新宗教運動は、環境問

題や難民救済、政治腐敗への糾弾などの社会的政治的な面でも積極的に参加していると、強く注目し始めたのである。1979 年に国際宗教社会学会の東京地域大会が開催され、その滞在中の諸講演を整理修正して刊行した『宗教の社会学』(原題 Religion in Sociological Perspective, 1982. 邦訳は 2002 年) に、そうした論調が明瞭に現れている。その時に開始された創価学会会長・池田大作氏との長期にわたる対話と成果の刊行 (Human Values in a Changing World, 1984. 邦訳『社会と宗教』上下、1985 年) や、イギリスの創価学会運動の研究 (A Time to Chant : The Soka Gakkai Buddhists in Britain, 1994. 邦訳『タイム・トゥ・チャント』1997 年) なども、彼の新しい関心と評価の表れであるといえる。

彼の世俗化論やセクト論は、激しい論争の的となった。日本でも、その著作の一部が早くから邦訳され (Religious Sects, 1970. 邦訳、池田昭訳『セクト』平凡社、1972 年、ほか)、日本の宗教研究や宗教界自体にも大きな影響を与えてきた。批判も少なくはなかったが、それは彼の立論が現代社会における宗教の運命を考える上で、極めて重要な点を指摘していたからに他ならない。そればかりでなく、セクト運動や新宗教運動のパイオニア的研究者としての彼は、一般社会から常に新奇で怪しげなものと思なされがちであった、それらの新しい諸運動に対して、終始、中立的で、かつ共感をもって論究し、現代社会における新しい形態の宗教であることを指摘し続けた。その主張は学問的業績のなかのみでなく、新宗教は有害なカルトであるという批判や関連する裁判に対して、彼らの主張や立場を擁護する記事や法廷陳述書を記すなど、宗教的自由を断固として擁護した。彼が個人的には「無神論者」であったことを思い合わせると、個人の自由と自律を何よりも尊重し、少数者の権利を護らんとする「信

念と行動の人」であった。

ウィルソン博士は、私的な時間においても常に白いワイシャツとネクタイをきちんと締めたスーツ姿で生活をし、食事もフォーマルなスタイルを好み、つねにメニューに合わせたフランスワインを自ら選んで楽しんでた。ワインに関しては、並のソムリエを越えた通であり、カレッジのワインセラーを管理していたばかりか、オックスフォード大学のワインクラブの顧問としてケンブリッジとの対抗試合に向かう学生を訓練していた情景を今でも思い出す。自分は「学問と結婚した」と公言してはばからなかった彼は、生涯独身を貫き、かつては独身を義務づけられていたオール・ソウルズ・カレッジの最後の独身フェローでもあった。

イギリス紳士の最後の一人かとも思えるウィルソン先生の一見堅苦しい姿の中身は、しかし、ユーモアと茶目っ気たっぷりな笑顔の優し

い素顔があったことを、親しい友人や学生たちはいつまでも忘れない。1997年にわが大学の客員教授として滞在していただいたときも、講義やゼミナールで学部生からの質問にも懇切丁寧に答え続けてくださったり、講義の後に院生を連れて八王子のフランス・レストランでディナーをご馳走してくださった。私どもは日本風の居酒屋に連れて行ったり、鎌倉や高尾山にハイキングに行ったりしたが、日本の滞在を充分に楽しんでもらえたことが、せめてもの恩返しであった。

厳しい学者であり、優れた教育者であったウィルソン先生、また若者には限りなく優しくかったアンクル・ブライアン、あなたの人生の軌跡は多くの人々の思い出の中にいつまでも生き続けることでしょう。有り難うございました。安らかにお休み下さい。

なかの つよし
創価大学教授